

経済的に1銭も出していない科学小国日本の天文学者は、腕一本で観測の機会を獲得しなければならない。日本人に機会が訪れるのは、実際上打ち上げ後1年以上経過してからになる。観測の募集は1981年頃からぼつぼつと出るであろう。

応募をうまくやるには、小さい衛星による天文観測を経験しておくのと有利である。今働いているものとして、Copernicus, SAS-3は随時観測申込を受けつけている

し、太陽極大用のSMMについては募集が出たところである。これらを積極的に利用することは、各人の経験を豊かにするのみならず、天文学界に衛星観測を気軽に利用する雰囲気を広め、かつ国内研究体制を宇宙的視野で見直すのに役立つであろう。天文学者の中で衛星利用の気運を今から高めておかないと、いざSTを利用しようという段になって、歯車がうまく廻らない恐れがある。

寺田勢造先生の訃を悼む

野 附 誠 夫*

前東京天文台技師・前東京理科大学図書館主任の寺田勢造先生は、去る10月13日にご老衰のため90年7ヶ月の天寿を全うされた。ご生前の長い間、ご温情に接した者の一人として、ご逝去を心から悼み、謹んでご冥福を祈る次第である。

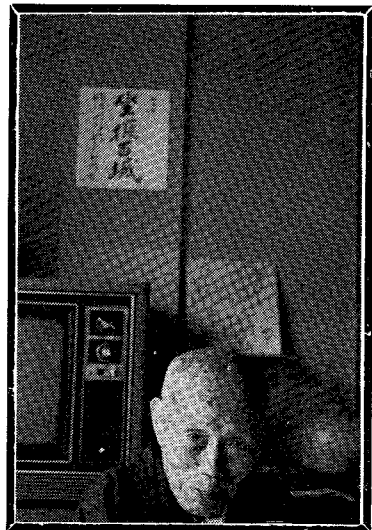
ご老境の先生には、どこか飄々とした風格と思いやりの深い人柄が見られた。初めて親しくしていただいたのは、三鷹の東京天文台合宿で、寝食を共にするようになってからで、今から52年ほど前のことである。思えば、速い月日の経過である。

先生は郷里の兵庫県の小学校を終えられた後、13才のとき大阪に出られ、米相場の鈴商の店員として5年間ほど勤められた。その後、学問を志して東京に出られ、肥塚氏宅に寄寓して、東京理科大学の前身の東京物理学校に入学された。この学校は、東京天文台の初代台長の寺尾寿先生達が創設されたものである。ご入学の当時、本田親二先生の名調子のご講義などでも有名な、すぐれた学校であった。

東京物理学校をご卒業後、明治44年5月麻布にあった東京天文台に、初めは助手として後には技手として、長い間勤務することになられた。この天文台は、大震災後三鷹に移転して現在に至っている。お仕事は終始一貫して編暦で、平山清次先生・小倉伸吉先生・松隈健彦先生・福見尚文先生達のご指導の下に行われた。昔の暦の計算は、対数表と算盤とで数字を取扱う大変骨の折れる仕事であったので、どんなにかご精根を尽されたことと思われる。

昭和20年10月には、三十数年間精勤された東京天文台をご退職されたが、大正14年10月から昭和3年6月までの間は、天文学と数学のご研究のために、フランスのソルボンヌ大学に私費留学されている。この期間は、初めの1年は休職であとは退職されて、勉学に専念

* 東京理科大学



されたようである。しかし、フランスにご滞在中は、日本から留学の多くの学者のお世話も、できる限りされていたようである。そのお一人に、当時第一高等学校教授の菅沼市蔵博士があった。同博士は、毎年7月14日に寺田先生と小生を招いてパーティ会を催されて、ご馳走をして下さったことが思い出される。昭和3年の秋に、先生が東京天文台に復職されたのは、同年の初めに編暦係の高橋潤三先生のご急逝により、急遽呼び戻されたことによるようである。

昭和12年には、令夫人ヒメ様とご結婚された。同夫人は、明朗潤達な生粋の江戸っ子で、しかも長唄の名取りで杵屋勝須枝と名乗られ、お宅で多くのお弟子の稽古をされておられた。寺田先生は、まことに天真爛漫の正真な方であったので、お若い頃には若い人達と衝突することもかなりあったようであるが、老年になるにつれ次第に緩やかで円満な品格を備えられるようになった。これには、令夫人のご内助の功が大きいと考えられる。

昭和24年11月には、東京理科大学に書記としてご就職され、後には図書館の司書・事務長事務取扱として、同館の係の若い方々と共に、学生勉学の便を懇切丁寧に計られた。昭和43年3月に、先生は東京理科大学をご退職されたが、その後もかつての学生で、先生をお慕いして先生のお宅を訪れる者が多いのは、先生の人徳の致す所である。

お趣味としての第一は、碁と将棋を好まれたことである。天文台時代には、碁では相当多くの方々と楽しんでおられたが、殆んど毎日戦を交されていたのは、福見先生や中根新治郎さん達であったようである。この人達とは、時には夜明しすることもあったと噂されていた。将棋でも、若い人達と時折り時を過されていた。理科大学時代とその後には、同大学教授の榎本芳郎先生を中心によく碁をされていた。特に理科大学をご退職後には、令夫人の長唄のお稽古の日には、ご健康のためもあって、小金井の榎本先生のお宅で碁をするために通われていた。先生のお足が思うように動かなくなってからは、令夫人も長唄のお稽古を止められ、榎本先生が寺田先生のお宅に毎週来られたようである。

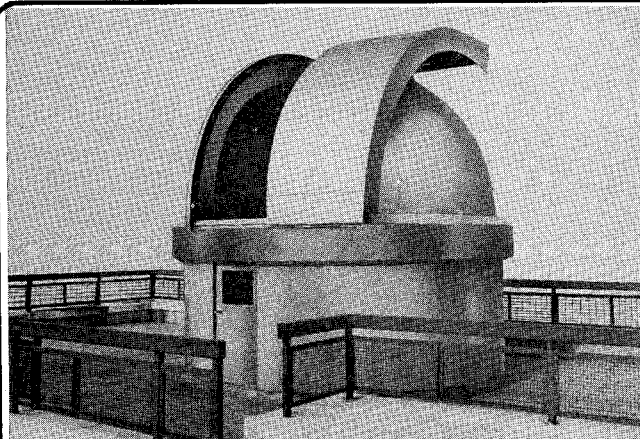
お得意のフランス語でも、若い娘さんのお友達がおられ、理科大学の図書館で文学の話がされているのをよく見かけたものである。先生はお年をとられても、なか

か積極性に富んでおられた。その一例は、独乙語のご勉強である。榎本先生の独乙語の授業を学生と共に受けられて、その試験の成績は学生の誰よりも優秀であったとのことである。この榎本先生は鮎釣りの名人で、よく多くの友人を集めては、鮎を食べる会や忘年会を催されたが、その時の会長には何時も寺田先生が推されていた。これらの会合で、寺田先生に興が湧かれると、調子外れのアメヤの歌で座興をそえられたものである。これは、遠い遠い昔、鮎を入れた小さな盥を頭の上ののせ、太鼓を叩きながら売って歩いた鮎屋の懐しい歌である。これも、今は思い出となってしまった。

東大の天文学科卒業の前台湾大学教授沈璿博士とは、特に親交が深く、上京の際には夫妻で、先生のお宅に泊ったほどであるので、同氏夫妻が先生の訃を知ったならば、どんなにか悲嘆に暮られることであろう。

先生は義を重んじた昔の英雄や学者の話をも好んでいられた。その中で、最も崇拜していた諸葛亮孔明の遺跡を訪れることを、楽しみにしておられたそうであるが、遂に果されなかったことは、ことに残念である。

先生のご一生を考えると、先生はつつましく野に咲いた一輪の花にも似ているが、多くの人達から親しまれ慕われた、すばらしい人物の一人である。先生のご他界は、まことに惜みてもあまりあることである。



- 営業品目
- ★天体望遠鏡ならびに双眼鏡
 - ★天体写真撮影用品及び部品
 - ★望遠鏡各種アクセサリ
 - ★観測室ドームの設計・施工

★総合カタログご希望の方は切手300円同封お申込みください

ASTRO 光学工業株式会社
 ASTRO 170 東京都豊島区池袋本町2-38-15 ☎03(985)1321